

NO. 46
March '09

Newsletter

神戸女学院大学
女性学
インスティテュート

環境問題と女性

川合真一郎

数年前にこのニュースレターで「サル学と女性」について取り上げ、霊長類学に取り組む女性が年々増加していることを述べた。その代表者としてチンパンジー研究の第一人者の英国のジェーン・グドール女史を紹介した。26歳のときにアフリカのタンガニーカ湖のほとりに母親と二人で基地を設け、粘り強い行動観察から、チンパンジーがシロアリ釣りをするときに小枝を加工して用いることを明らかにし、道具の使用が人類の専売特許でないことを示した。その後、多くの研究者によりチンパンジーだけでなく霊長類の行動や学習に関する報告が次々となされている。今もグドール女史は世界中を飛び回ってチンパンジーの保護を訴えている。本学の主題コースの「女性学実践編」で私が担当する時間にもグドール女史の研究を紹介しているが、その際にもう一人の女性研究者で「サイレント・スプリング」の著者のレイチェル・カーソン女史を紹介している。カーソン女史の名前を耳にしたことがある者は少なくない。本書は農薬の野放図な使用が野生生物の生存を脅かしていることを警告し、このことが世界中で残留性や毒性の強い農薬の使用規制を加速した。しかし、カーソン女史は農薬の全面禁止を訴えているわけではなく、適切な使用を強調しているのである。カーソン女史の著作「センス・オブ・ワンダー」も有名である。不思議なことに驚嘆する感性、美しいもの、未知なもの、神秘的なものに目を見張る感性の大切さを甥との自然散策を通じて読者に訴えている。

環境問題は研究者に限らず女性が持つ本来的あるいは本能的な感性により解決に向かった例も少なくない。

1970年代にインド北部の森林地帯で政府と業者によるヒマラヤスギの伐採に対して住民の激しい反対運動がおこった。女性たちがリーダー役となり、樹木に抱きついて自らを縛り、伐採を食い止めた行動はチプロ（ヒンディ語で「抱きつく」という意味）運動と呼ばれ、世界の環境保護運動の歴史に刻み込まれている。チプロ運動の主役の女性たちは特別に教育を受けたわけでもなく、本能的に反対運動に身を投じたのである。

二つ目の例は原発から出る高レベル放射性廃棄物の処分場を誘致するかどうかについて2007年に漁師のまちである高知県東洋町で誘致派の町長候補者の選挙をめぐって町民の意見が2つに分かれた。処分方法は廃

棄物をガラス固化体にし、地下300mに埋設しようというものである。結果的に誘致反対派の圧倒的勝利で決着した。選挙戦の中で女性の果たした役割は大きい。ある女性の言、「夫が漁で沖に出ているときに陸の一大事は私らがやらなあかん。女性は子を産み、子孫を増やす原動力、海と山に囲まれた自然を子供に残したい。核のごみのまちはかわいそう」、また、76歳の女性は「安全で、ええ処分場ならどうしてこんな辺鄙な町に作りたがるんかい」と。二人が言っていることは単純明快で小難しい理論よりも筋が通っている。

水俣病で患者救済に命を賭けてこられた原田正純医師（当時熊本大学医学部）をここまで水俣にひきつけて離さなかったのは患者の母親たちである。当時、医者仲間では「魚を食べなければ水俣病にならない、魚を食べる前に発病したのは脳性小児麻痺である、胎盤は毒を通さない」が常識であったが母親たちはこれを信じていない。科学的知識など持ち合わせていない母親は自分が食べた魚の中の水銀がおなかの中で子供に移行したと信じており、のちにそのことが実証された。原田医師は「これまでの水俣病の定義は完全に覆され、目が覚めた。悔しいからまたやり直そうと思ったことが私を40年間も水俣病につないだ」と述べている。

いろいろな分野での女性研究者の進出は目覚ましいし、社会で華々しく活躍している女性も多い。その一方で、上に紹介したように特別の科学的素養がなくても環境問題の中で重要な役割を果たしている不特定多数の女性も多い。本学において環境にかかわる講義科目を学んだ学生諸君が環境問題の本質を理解し、社会で、また家庭で底力を発揮してくれることを願っている。

(学長、人間科学部教授：生態毒性学)

学外講演会で講演を行なって

【第1回：2008年10月28日】……………北川将之

●「マイクロファイナンスの女性と政治参加 —南インド農村の事例から—

今回の講演では、貧困であるがゆえに、そして女性であるがゆえに強い絆で結ばれたマイクロファイナンスの女性たちに焦点をあてて、彼女たちの近年の意識変化を論じた。具体的には、インド南部カルナータカ州の農村で収集してきたデータを紹介しながら、貧困女性たちがマイクロファイナンスで培われた協働の経

験を通して自尊心を育み、私的領域を越えて村の公共事業についても問題意識を深めていることを述べた。

マイクロファイナンスで小額の融資を得て、経済的に自立しようとしている女性たちは、インドで年々増加している。その数は約5,000万人(2006年3月時点の統計)に達しており、過去10年で数十倍に膨れ上がっている。その背景には、国際農業開発基金や世界銀行などの国際機関や、インド全国農業農村開発銀行や民間銀行などの国内機関が、マイクロファイナンスに近年積極的に取り組んでいることがある。

こうして組織化されたマイクロファイナンスで様々な社会経済活動をしている貧困女性たちは、概して言えば、伝統的権威に対する批判精神をもち、自ら直接政治に関与しようとする意識が強い。現在のようなマイクロファイナンスがなかった1980年代の意識調査データと照らし合わせると、村議員や役人の所へ自ら相談しに行くなど、従来厚い壁で閉ざされてきた政治の領域にも貧困女性たちが参加しようとしていることがよくわかる。

貧困という過酷な境遇に置かれたインドの女性たちが、マイクロファイナンスという団体活動を通して仲間と共に自立の道を歩み、幾多の困難を乗り越えようとする姿は、日本にいる私たちに多くのことを教えてくれるように思う。(文学部専任講師：比較政治学)

【第2回：2008年11月28日】……………小林知博

●「賢い消費者となるための心理学

— 説得テクニックに騙されないために—

11月28日、「賢い消費者となるための心理学～説得テクニックに騙されないために～」と題して、女性学インスティテュート学外講演を行いました。

講演は、以下の3つの部分で構成しました。(1)「行動科学としての心理学」の簡単な説明、(2)本題の前半として「日常的な説得・依頼のテクニック」、(3)後半として「詐欺行為において用いられる『だまし』」の3つです。(1)では社会心理学の基本的な考えをご理解いただき、(2)と(3)では、それぞれの特徴と防衛策、そして心理学の見解が説得テクニックにどう用いられているかについて、具体例を交えて講義しました。例えば(2)では「人は他者から何か与えられたら、その恩に報いるよう将来お返しをしたくなる」という「返報性のルール」がいかにか私たちの普段の生活や購買行動に入り込んでいるかについて、また、広告業界の調査例などをご説明しました。(3)では、詐欺の典型的なテクニックについてご説明した後、警視庁のHPでも公開されている振り込め詐欺の実例(音

毛髪元素分析であなたの健康診断を

山本 義和

私が担当している環境科学基礎実習では受講生各自が自分の毛髪を使って、水銀と亜鉛の分析を行っている。この実験目的は毛髪に含まれる元素濃度を調べることによって、有害な元素を過剰に摂取していないか、栄養上必要な元素が不足していないかなどを科学的に知ることである。水銀は有害な元素、亜鉛は栄養上必要な元素の代表格である。一般的に、毛髪は血液や尿よりも高濃度の元素を含有しており、保存中に変質しないので正確な分析値が求められる。サンプルの必要量も少なく、サンプリング時に被験者の苦痛も比較的少ないなどの利点がある。現在までに、水銀については534名の分析値が得られており、その平均値と標準偏差は 1.37 ± 0.93 ppmである。国立水俣病研究センターが日本人で求めた平均値は、男性では2.5ppm(3,668人)、女性では1.6ppm(2,265人)である。女性が男性よりも水銀が少ないのは、妊娠・出産時に母体から胎児に水銀が移行するためである。胎児や幼児は水銀に対する感受性が高いので、母体の水銀蓄積が目ざされており、その判断指標として母親の毛髪水銀濃度が利用されている。FAO/WHO合同専門家会議では胎児に影響がみられない上限値として14ppmを提示している。水俣病患者さんでは100ppmを超える方が多くおられたことは忘れられない。

日本人では水銀摂取量の約90%が魚介類由来であり、欧米人よりも毛髪水銀濃度が高いことから、厚生労働省は「これからママになるあなたへ」というパンフレットを作成し、胎児への影響を防ぐために妊娠中あるいはその可能性がある人は、水銀濃度の高いマグロ、カジキ、キンメダイなどの過剰摂取を控えるように注意を呼びかけている。その一方では、魚類には動脈硬化などを防ぐEPA・DHAなどの高度不飽和脂肪酸、血圧降下ペプチドなど栄養や機能性に富んだ健康維持成分が多く含まれている。そして、私にとって酒のあてには魚が最高である。昨年、農林水産省で魚食のベネフィットとリスクの研究プロジェクトがスタートした。小生も関与しているが、なんとも悩ましい研究課題である。

(人間科学部教授：環境科学)

Farewell...for the Women's Institute

Cynthia SETON

I was surprised when asked to write a farewell to the Women's Institute because I am not a member. Why am I not a member? It probably goes back to my Catholic church and schools' training, listening to letters from missionaries abroad and doing volunteer activities.

After college, I was a Peace Corps volunteer for two years. I taught in a lycee in Tunisia where some of us also started other social projects like opening a library. After coming to Japan, I traveled to Thailand and was very impressed by some of the handicraft cooperatives started by female university professors there.

I knew that in Asia many female university teachers were from the elite and that they feel it a duty to help the poor in their own countries. So when Kobe College first started a women's institute, I thought the main goal would be to help and encourage poor and disadvantaged women in Japan.

When I once tried to help a women's shelter in Tokyo long ago, I was told I could not ask students for donations. I have participated for many years at the Kobe International Charity festival which donates 90% of the proceeds to international and Japanese charities.

When the Global Communication course started, we teachers wanted to have a booth at the bazaar making and selling things and giving the proceeds to various charities, too.

Again, I was told that 'you can't do that' because the bazaar was for making money for student clubs. How does one show leadership and teach students to think of the poor and disadvantaged, instead of luxury handbags? I had thought that might be the goal of the Women's Institute. Again, I was wrong.

声)を紹介し、対処法をいくつかご紹介しました。

本講演のテーマは、近年増加している振り込め詐欺の影響で関心が高まっていることもあり、当日は男女ともに多くの方がお越し下さいました。頂いた感想にも「自分も騙されないか心配」や「対策を今後の生活で使ってみたい」というものが多くありました。こういった社会問題についてはテレビなどで不安が煽られることが多いですが、今回のような機会をもって、学術的な見地を交えた情報の提供、また普段の生活の中での対策について市民の方々と一緒に考えていくこともできるのだ、と改めて考えさせられました。

(人間科学部准教授：社会心理学)

2008年度後期活動報告

I 講演会・セミナー等

[前期開講分については前号を参照のこと]

学外講演会

会場：西宮市大学交流センター

<第1回> 2008年10月28日(火)

「マイクロファイナンスの女性と政治参加
— 南インド農村の事例から」

講師：北川将之氏

(神戸女学院大学文学部専任講師：比較政治学)

<第2回> 2008年11月28日(金)

「賢い消費者となるための心理学
～説得テクニックに騙されないために～」

講師：小林知博氏

(神戸女学院大学人間科学部准教授：社会心理学)



北川将之氏

小林知博氏

II 研究助成

「性的搾取を目的とする少女の人身売買の防止と被害回復措置についての研究」

米田真澄 (文学部准教授)

III 学会等出張補助 (国内・海外)

「『フィルムが紡ぐ女たち』(09年版) 出版記念会」
に出席

(北沢タウンホール：2008年11月29日)

「2008国際女性の地位協会国際シンポジウム」に出席

(女性と仕事の未来館：2008年11月30日)

米田眞澄 (文学部准教授)

IV 授業 Cu134(1)(2)「女性学 (実践編)」

Cu234(1)(2)「女性学 (理論編)」

Cu134(1)(2)「女性学 (実践編)」、Cu234(1)(2)「女性学 (理論編)」[主題コース]として前期後期とも本学にて開講した。

V 学生懸賞論文 (「女性学インスティテュート賞」)

2008年度 (第10回) は3編の応募があり、選考結果は以下の通り。

<優秀賞> (2編)：賞金2万円 (賞状)

望月智代氏

(神戸女学院大学文学部2008年3月卒)

澤田さゆり氏

(神戸女学院大学文学部2008年3月卒)

表彰は2008年10月17日神戸女学院講堂において学院の各種記念授与式とあわせて行なわれた。

VI 出版物

『女性学評論』第23号 (2009年3月発行)

「ニュースレター」No.45 (2008年10月発行)

「ニュースレター」No.46 (2009年3月発行)

— 2009年度(第11回)学生懸賞論文募集 —

賞の名称は「女性学インスティテュート賞」。対象は本学学生 (学部生・大学院生) 及び2008年度の本学卒業生・修了生が執筆した女性学、ジェンダー・スタディーズに関連する領域の論文。最優秀賞論文(1編)には賞金5万円及び賞状、優秀賞論文(2編)には各2万円の賞金及び賞状が授与される。また最優秀賞論文については『女性学評論』第24号(2010年3月発行予定)に全文が掲載される。締切は2009年7月22日(水)。選考結果の発表及び表彰は2009年10月中旬の予定。詳細は当インスティテュートまで。

— 2009年度前期講演会等のご案内 —

■特別講演会

日程：2009年6月5日(金) 10:35~11:25

会場：神戸女学院講堂

講師：上野輝将氏 (神戸女学院大学元教授)

演題：「近江絹糸人権争議とクリスチャン」

<申し込み：不要、受講無料>

■連続セミナー「女性と子どもの人身売買」

日程：2009年6月12日~7月3日、

14:00~15:30 (全4回)

会場：神戸女学院大学 JD-104教室

<第1回> 2009年6月12日(金)

「奴隷にされない権利は保障されているか」

講師：米田眞澄氏

(神戸女学院大学文学部総合文化学科教員)

<第2回> 2009年6月19日(金)

「日本の人身売買対策の現状と課題」

講師：吉田容子氏

(弁護士・立命館大学法科大学院教員)

<第3回> 2009年6月26日(金)

「エンターティナーから配偶者そして介護・看護労働者へ?」

講師：藤本伸樹氏

(財アアジア・太平洋人権情報センター研究員)

<第4回> 2009年7月3日(金)

「闇の子どもたち」

講師：齋藤百合子氏

(恵泉女子学園大学人間社会学部国際社会学科教員)

定員：50名 * 3回以上の出席者には修了証を発行

<申し込み：要、受講無料>

女性学インスティテュート
インターディシプリナリー・プログラム

「女性学インスティテュート インターディシプリナリー・プログラム」は、学生における「女性学、ジェンダー・スタディーズ」の認識を高めることを目的とし、本学で開講される科目のうち、女性学やジェンダーの視点を取り入れたものを在学期間中に「女性学(理論編)」、「女性学(実践編)」を含む10単位以上を取得した学生に、「プログラム」修了証を交付する制度です。

修了証を希望する学生は、必要単位の履修を証する書類(成績表等)を女性学インスティテュートに提出しますと、学期末に修了証が授与されます。なお、各年度において該当する科目は、年度初めに告知します。

2008年度女性学インスティテュート編集委員

谷 祝子、鶴野ひろ子、渡部 充(委員長)、山本義和
(ABC順) 編集事務：溝口芳子

編集・発行：神戸女学院大学女性学インスティテュート

☎662-8505 西宮市岡田山4-1 TEL/FAX:(0798)51-8545

URL <http://www.kobe-c.ac.jp/gender/>